

### 第3回 イスラーム・セミナー開催 「イスラームと女性の権利」

平成17年12月10日（土）午後2時より拓殖大学文京キャンパスS館401号教室で当研究センターの第3回目のイスラーム・セミナーが開催された。参加者は学生や一般の人を含めて約120人あった。セミナーはこれまでシャリーア（イスラーム法）に関するテーマを取り上げイスラームの理念と実態を提示し、参加者にイスラームの正しい理解を深めてもらうために外国から講師を招いて開催してきた。昨年はシャリーアにおける「ハラール（合法）とハラーム（禁止）」について主に飲食物の面から見たシャリーアの規定と実態を、特にインドネシアとマレーシアで個々の商品を調査しハラール認証を出している機関で働く責任者の方においでいただき、各国の取り組みと実態について講演してもらった。今回選んだテーマは最近欧米社会で話題になった女性イスラーム教徒のヒジャーブ（髪の毛を隠すスカーフのような覆い）問題などからイスラームにおける女性の地位や権利について正しく伝えられていないと感じることが多く、そのため、改めてシャリーアにおける女性の立場と権利を明らかにし、イスラーム社会でのその実態について知ってもらう目的でセミナーを開催した。今回はパキスタンからはリブ八国際大学副学長のアニス・アフマド博士にパキスタンにおけるイスラームと女性の地位について講演していただき、日本在住でマレーシアのイスラーム国際大学の博士課程に学ぶインドネシア人イエティ女史には自らのインドネシアとマレーシアと日本での体験を語ってもらうことになった。

講演会はいつものようにクルアーンの朗読から始まり、森伸生イスラーム研究センター長の開会の挨拶に続き、森本敏拓殖大学海外事情研究所所長から今回のセミナーの意義についての話がいった。セミナーは休憩を挟んで二部に分かれて三つの講演と質疑応答という形式で行なわれた。以下セミナーの要約をお伝えしたい。

#### 講演 1. 「イスラーム法の中に見る女性の権利」

講師 柏原良英 拓殖大学イスラーム研究センター主任研究員  
 イスラームの女性の権利や平等について一般的に語られたりイメージされるとき、ほとんどが黒い布で全身を覆い自由に外出もできないという否定的な面ばかりが強調されてるが、それは本来イスラームで言われている女性についてのことと同じなのかどうか。もう一度シャリーア（イスラーム法）の中で女性の立場はどのように扱われているかを確認しておかなければならない。イスラームでは基本的に男女をどのように考えるかを見てみると、クルアーンの「かれは一つのナフス（アダムの魂）からあなた方を創り、またその魂から配偶者を作り、兩人から無数の男と女を増やし広められた方であられる」（4章1節）の記述から分かるようにその創造において男女は一つの魂（ナフス）から創られておりそこには何の違いもない。そこからイスラームで言われるのはアッラーの前では男女は平等であり、違いがあるのはそれぞれの信仰の強さだけである。このイスラームの基本の上にシャリーアが男女の信者に求めるものは謙虚さや忍耐や相手への慎みであり、結婚した男女へは互いの信頼であり愛情である。そしてそれぞれが自分の役割に責任を持つことが求められる。それは預言者ムハンマドの言葉「イマームは社会全体を率いる羊飼いでその責任があり、男は家族という群れを率いる羊飼いで

それに対する責任があり、妻はその家庭を守る責任を持つ」に表れている。その上で女性の権利は守られていて、女性が自ら稼いだ財産や相続したものは夫であっても妻の許可なしには自由に出来ない。ただ家庭において男は妻や家族を養う義務を負わされている分だけ遺産相続においてはその取り分を多く認められている。それはイスラームの平等の考えから来たものである。このようにイスラームでは女性が不自由な暮らしを強いられて平等に扱われていないという主張は本来のイスラームの規定からは出てこないと言える。

#### 講演 2. 「非イスラーム社会におけるイスラーム女性の立場」

講師 イエティ・ダリミ マレーシア国際イスラーム大学博士課程在籍

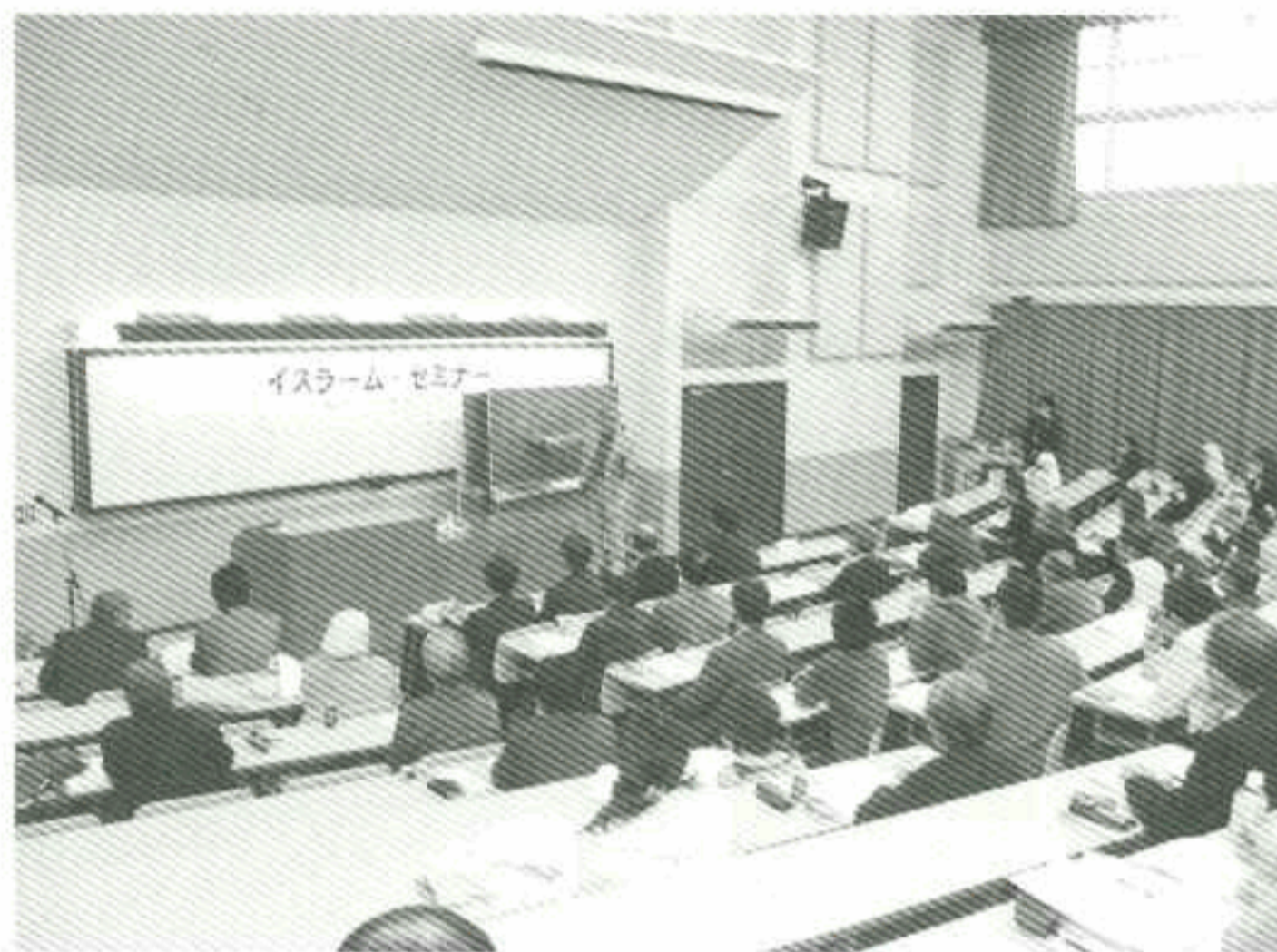
女性のイスラーム教徒としていくつかの国で暮らしそれぞれの国でのイスラーム体験から女性の立場がどのように扱われているのかその実態を話したい。自分の生まれはインドネシアで国籍もインドネシアだが大学はマレーシアに留学した。それはインドネシアでは人口の90パーセント近くがイスラーム教徒であるのにイスラームが国教になっていないばかりかスハルト大統領の時代にはイスラームの活動は宗教省の管轄下にあって制限されていたためである。それでイスラームの勉強がしたくてイスラームが国教になっているマレーシアに留学することになった。マレーシアへ来て感じたことはインドネシアではイスラームは学歴と社会的地位の低さの象徴だったのがここでは逆に高学歴の人ほどイスラームを守り実践していることだ。また女性の社会進出も進んでいることはインドネシアでは考えられなかった。またイスラームが少数派の日本での生活体験からは良い面と不自由を感じる両面を体験した。困った体験から言えば、例えばイスラームでは禁じられている食べ物や飲み物のことにいつも注意しなければならないことや、子供のイスラーム教育が専門の学校がないために十分にできない不安があることなどである。日本人との関係では表面的には親切にしてくれるが心の中で何を考えているのか分からないところがある。プライバシーについてはオープンにしないなどの習慣の違いに戸惑った。また良い面について言えば日本ではイスラームに対する具体的な偏見や差別にまだあったことが無いことや、衛生や健康管理によく注意を払っていることや、仕事に対してまじめで誠実に取り組んでいるところなどはイスラーム教徒も見習うべきだと思った。そして日本の生活に慣れるにしたがって日本にいるイスラーム教徒との交流も持てるようになって生活も安定した。また日本のイスラームについて感じたことは様々なイスラームの活動が行われているが、モスクの中だけとかイスラーム教徒同士の中だけに限定される傾向があり残念に思う。そして日本人からよくイスラームのことを尋ねられるたびにもっと一般の人にもイスラームが理解されるよう努力していくべきだと感じる。それには自分の語学力を高める必要を感じる。これからはより深く日本語とその文化を理解して自分達の中に良いものは取り入れていき、イスラームの良いところをもっと広めていきたいと考えている。

またイスラームが少数派の日本での生活体験からは良い面と不自由を感じる両面を体験した。困った体験から言えば、例えばイスラームでは禁じられている食べ物や飲み物のことにいつも注意しなければならないことや、子供のイスラーム教育が専門の学校がないために十分にできない不安があることなどである。日本人との関係では表面的には親切にしてくれるが心の中で何を考えているのか分からないところがある。プライバシーについてはオープンにしないなどの習慣の違いに戸惑った。また良い面について言えば日本ではイスラームに対する具体的な偏見や差別にまだあったことが無いことや、衛生や健康管理によく注意を払っていることや、仕事に対してまじめで誠実に取り組んでいるところなどはイスラーム教徒も見習うべきだと思った。そして日本の生活に慣れるにしたがって日本にいるイスラーム教徒との交流も持てるようになって生活も安定した。また日本のイスラームについて感じたことは様々なイスラームの活動が行われているが、モスクの中だけとかイスラーム教徒同士の中だけに限定される傾向があり残念に思う。そして日本人からよくイスラームのことを尋ねられるたびにもっと一般の人にもイスラームが理解されるよう努力していくべきだと感じる。それには自分の語学力を高める必要を感じる。これからはより深く日本語とその文化を理解して自分達の中に良いものは取り入れていき、イスラームの良いところをもっと広めていきたいと考えている。

またイスラームが少数派の日本での生活体験からは良い面と不自由を感じる両面を体験した。困った体験から言えば、例えばイスラームでは禁じられている食べ物や飲み物のことにいつも注意しなければならないことや、子供のイスラーム教育が専門の学校がないために十分にできない不安があることなどである。日本人との関係では表面的には親切にしてくれるが心の中で何を考えているのか分からないところがある。プライバシーについてはオープンにしないなどの習慣の違いに戸惑った。また良い面について言えば日本ではイスラームに対する具体的な偏見や差別にまだあったことが無いことや、衛生や健康管理によく注意を払っていることや、仕事に対してまじめで誠実に取り組んでいるところなどはイスラーム教徒も見習うべきだと思った。そして日本の生活に慣れるにしたがって日本にいるイスラーム教徒との交流も持てるようになって生活も安定した。また日本のイスラームについて感じたことは様々なイスラームの活動が行われているが、モスクの中だけとかイスラーム教徒同士の中だけに限定される傾向があり残念に思う。そして日本人からよくイスラームのことを尋ねられるたびにもっと一般の人にもイスラームが理解されるよう努力していくべきだと感じる。それには自分の語学力を高める必要を感じる。これからはより深く日本語とその文化を理解して自分達の中に良いものは取り入れていき、イスラームの良いところをもっと広めていきたいと考えている。

#### 講演 3. 「パキスタン社会における女性の権利と実状」

講師 アニス・アフマド パキスタン・リブ八国際大学副学長  
 まず西欧で言われている女性の権利や平等は、かつての男性社会の中





で女性が不当な扱いを受けてきた結果起ってきた思想だということを確認しなければならない。その上でイスラームにおいてもそのようなことがあったのか、あるいは今も続いているのかということから議論を進めるべきだ。イスラームの男女の権利の平等についてはクルアーンの中で「本当にムスリムの男と女、信仰する男と女、献身的な男と女、正直な男と女、堅忍な男と女、謙虚な男と女、施しをする男と女、断食をする男と女、貞節な男と女、アッラーを多く唱念する男と女、これらの者のためにアッラーは罪を赦し、偉大な報奨を準備なされる」(33章35節)と書かれているように、それぞれがイスラーム教徒として勤めを果たし倫理道徳を守る者には男女の区別なく神の報酬が約束されていることを理解すべきだ。また一見不平等に見える事柄においてもそこにはイスラームの求める公正さ平等思想の表れを見るべきだ。例えば遺産相続においてイスラームでは男性が女性の倍の相続を行うとされているが、これは女性の権利を侵すものではない。何故ならイスラームでは男性に家族を養う責任を負わせているからで、もし遺産が均等に分けられるとすれば一家を支えていく義務を負わされた者はその責任のないものと同じ財産で家族を養うことになり、はたしてそれは本当の意味での平等といえるのであろうかというのがイスラームの平等思想だ。単純に等しく分けるだけが必ずしも公平になるわけではない。また女性の政治参加についてイスラーム社会における女性は最も透明、見えない構成要員であり、男性至上主義の社会であり、女性は政治的な役割を果たすことが求められていないというふうに言われているが、これについては、2つのことを確認したい。まず一つはパキスタンでは過去二回女性が首相を務めた事実がある事と、議会の33パーセントの議員が女性であるということである。はたしてどれだけの国で女性議員の割合がパキスタンより高いところがあるかを確かめてからイスラームの女性が政治に参加していないと発言しているのか尋ねたい。つまりイスラームで重要なのは男女の違いではなくそれにふさわしい資格を持つ者がそれを行うということである。

またイスラームでは証人の数について男性一人に対して女性が二人必要であるから女性の地位が男性に比べて低いのではないかという考えについて話すと、確かにクルアーン第2章282節に経済的な契約を行う場合に、男性の中から二人の証人を選んで文書に調印させなさい。ただ何らかの理由があって、二人の男性を得られない場合には、一人の男性と二人の女性を確保しなさい。それは一人の女性が忘れた場合にはもう一人が覚えているようにするためであるというふうに書かれている。つまりイスラームを非難する人はこのクルアーンの記事を見て、イスラームの法律では、女性の証言は男性の2分の1の価値しかないと主張する。しかしこれは二人の証人が得られない場合のやり方で、少なくとも二人女性がいたら、一人が忘れていても、もう一人が覚えているということだ。例えば殺人事件で証人が女性しかいなかった場合その証言は認められないかということとそんなことはない。クルアーンに4人の証人が必要であると書かれていれば、それは男であっても女であっても4人いればいいのである。決して女性の証言が軽視されているという意味ではないことを理解しなければならない。

またイスラーム社会にある家庭内暴力や名誉殺人などについてもイスラームと暴力を結びつけるのは間違っている。家庭がいかに大切かについて預言者ムハンマドは、「あなた方の中で最もよい者は、自分の家族に対して最も善い者である。私は私の家族に対してあなた方の中で最も善い者である」と語っているように家族に暴力を振るうことを認めるわけがないし、かつてどの様な宗教であれ他国を侵略したり暴力を振るったりしない宗教はなかったはずである。だがだからといって仏教やキリスト教が悪いとは誰も言わずにイスラームだけ非難するのはおかしい。悪いのは人間であって宗教ではない。それからイスラーム社会で悪習としての名誉殺人があるとすれば、それはイスラームを理解していない者がその地域の慣習としてそれをやっているのである。このように悪いことを単純にイスラームのせいばかりにすることは危険で誤解を増大させるだけである。これからの世界は互いの宗教や文化を認め尊重しあうことから始めなければならない。

今回のセミナーでは、イスラームにおける女性の権利や立場について一般的にもたれているイメージを本当のところはどうなっているのか、シャリーアの中ではどのように規定されているのかを検証する目的で行われたものであるが、様々な誤解が解消されたと感じている。

## イスラーム・セミナーの感想

拓殖大学外国語学部4年 柴尾 恵美子

以前から私はイスラームに大変関心を持っていた。それは自分が世界史がとても好きで特に日本人になじみが薄いイスラームに大いに興味を引かれていた事もある。また現在スペイン語を専攻しているが当然言語だけではなく、歴史的背景や文化についても学ぶ。スペインはヨーロッパの一国であるが、イスラームの影響も受けている。何故ならば718~1494年までの間にスペインを含むイベリア半島をイスラームが支配していたからである。このような歴史的背景や文化的融合の面でイスラームと繋がっている。

今回のセミナーでは授業や本を読んで得た知識をより確かなものとし、3人の先生方のお話を実際聞くことで今まで気づけなかった事に目を向ける事が出来た。

まず私が驚いたのは講演を始める前にクルアーンの朗読を行った事である。イスラーム世界では何か催し物を始める前には必ずクルアーンを朗読するそうである。そしてこれらの朗読にはアッラーを讃える意味がある。また挨拶などでも必ずアッラーが出てくる。この事から信徒は常日頃からアッラーを意識している事が分かった。次に講演の中で気がついたのは柏原先生とアニス先生が女性の財産について述べていたことだ。これは財産について女性が不利に扱われているという誤解を解く意味から取り上げて話されたのだろう。柏原先生によれば女性が所有する財産や自ら稼いだものは後見人や夫でも無断で使うことはできないとの事。ただ財産分与で男性が女性よりも多く相続するのはその社会的背景を考慮しているからとアニス先生が説明していた。それは一家の大黒柱を失った時長男が家族を養う義務が生じるからである。その為男性には女性の倍の額を支払う事になる。別な言い方をすれば男性側により多くの責任を負わせている為に自分だけではなく家族や彼の援助を必要とする者全てを養う義務があり、女性にはその義務がない為だ。そしてこの決まりはアッラーによって決められているのである。またこのほかにも両先生とも生物学的な男女の差異があるのは認めるがイスラームでは男女は基本的に同権つまり男女平等である事を強調していた。何故ならばイスラームでは男女は同じ一つのナフス(魂)から創造されたものであり、そこには何の違いも無い。アッラーの前では男女皆平等である。もう一つ興味を引かれたのはムスリマ(女性のイスラーム教徒)の服装についての考え方である。この服装を見ると大抵の人はイスラームでは女性の自由を奪っている様にも見えるがそうでは無い。ここでは男女の関係で求められるのはお互いが性的な事を露骨に表さない事であり、互いに慎みをもって相手を直視しない様に求められている。お互いに尊敬の念を持つことが求められるのだ。そして男性が女性の名誉を汚す事も禁止されている。万が一それを破れば厳しい罰則が加わる。イスラームが一方向的に女性を抑圧している訳ではない事が分かった。

もう一つ私が驚いたのはイエティ先生の話である。彼女はインドネシア国籍であるがスハルト政権下ではイスラーム活動が禁止されていて、友人の助言と誘いでマレーシアへ留学していた経験を持っている。インドネシアは国民の87%がムスリムであるが国教ではない。私自身イスラームの国はどこも同じではないかと考えていただけにイスラームが国教のマレーシアとインドネシアが正反対である事に驚いた。

また彼女の話で興味深いと感じたのはインドネシアではイスラームの実践は学歴と地位の低さの象徴であったが、マレーシアではむしろその逆で高学歴層にイスラームを実践する傾向があるそうである。さらに日本での経験についてもお話をされていたが、そこではムスリムが日本で生活する上で食事の違いは勿論の事、様々な文化や価値観の違い等で困惑する事が多いと改めて感じた。また彼ら(ムスリム側)からすれば日本人は表面的には当たり障りがないが、本当は何を考えているのか理解しかねるといった問題も有る様だ。何故この様な事が生じてしまうのであろうか。恐らく日本人にイスラームがマスコミの影響で誤解されて伝えられているのが大きな原因であると考えられる。彼女は繰り返し自分たちも日本文化の長所を受け入れる事が大切だと説いていたが、それは私達日本人にも同様の事が言えるのではないかと。また西洋の思想等でイスラームが男尊女卑をしているとは一概に言い切れない事を改めて実感した。



## ヨルダン訪問記

イスラーム研究センター主任研究員 柏原良英

2月10日から17日までの一週間、森伸生イスラーム研究センター長とヨルダンを訪問した。二人ともヨルダンは初めて訪れる国だったので貴重な体験をすることができた。まずヨルダンの首都アンマンに着くまでに乗り継ぎを含めて24時間以上かかり改めてその遠さを実感させられた。アンマンは標高6百メートルほどの高地にあるから寒いとは聞いていたが果たして東京より寒かった。それに今は雨期の季節で空はどんより曇っていて我々の知っているアラブの国とはとても思えなかった。空港から街中までは荒涼としたなだらかな岡が続き、白っぽい石造りの家が点在する。ただ松か杉のような木が道の両側に生えていて雨がよく降る土地であることを想像させる。

今回の旅行はアンマン在住の拓殖大学第102期卒の室達康宏氏が関係機関に連絡を取ってくれ大変助けられた。一週間という短い期間の中で最大限イスラーム関係者に面会できたのは、彼の尽力によるところが大きかった。

### イスラーム法最高裁長官との面談

今回の訪問で最初に我々が面会したのはヨルダンのイスラーム関係の最高権威者と見られているイスラーム法最高裁長官のアフマド・フライル師だった。師の事務所はそれほど大きくなく町の一角にあって出入りの人で混雑していた。師の容貌は先に亡くなったフセイン国王に似ていて穏やかな品のある人柄が感じられた。丁度世界はイスラーム教の預言者ムハンマドの風刺画騒動で揺れ動いているときだけに師は抗議はするが暴力を否定するというヨルダン政府の立場を明確に伝えてくれた。また我々が日本で初めて本格的なイスラーム研究センターを作ったことを伝えると、日本において正しいイスラームの普及に果たす意義を理解し協力を惜しまないことを約束してくれた。師は著名人だけあって新聞記者がさっそく我々との面会を取材し、写真入で翌日の新聞に掲載していた。更に師の力のすごさを知らされたのは翌日、師の紹介でヨルダン王家の現国王の弟の一人であるハーシム王子と面会する機会を得たことである。師は王家のイスラーム教指導者の立場にあることから王族の信頼を一身に集めており、国内におけるイスラーム関係の最高責任者として一目置かれているのである。訪問の最初に師に面会できたことはその後の訪問に大きな力になった。

### ヨルダン最高法勸告者(ムフティー・アーム)

#### サイド・フジャーウィー師を訪問

次に我々はヨルダンにおけるシャリーア(イスラーム法)の実態を知るために面会したのが最高ムフティーであるサイド師である。師によるとヨルダンではシャリーアが実際に運用されているのは主に家族法に関する分野で、相続や離婚問題などに関してイスラーム法上の判断を下し、裁判所で最終的な判決が確定するそうだ。ムフティーは各地域にいて人々の相談に乗りそこで判断出来ない問題について彼の意見を求めるようになっている。また一週間に一度はムフティーとイスラーム法学者とそれぞれの分野の専門家が集まり政府から要請のあった問題について協議し、イスラーム法上の統一見解を出している。これまでに臓器移植の問題や女性のヒジャーブ(髪の毛を隠すスカーフのようなもの)問題など重要な案件についてそのつど答申してきているそうだ。ヨルダンではムフティーの立場は宗教省の中の一機関としての扱いで、サウジアラビアのように大きな力を持っているようには見えなかった。

### 国立ヨルダン大学シャリーア(イスラーム法)学部長との再会

13日、三番目の訪問先であるアブドルマジード国立ヨルダン大学シャリーア学部長を訪問したとき奇跡が起きた。我々が広大なキャンパスの中のシャリーア学部の建物をようやく見つけて学部長室に案内されて、その椅子に座る盲目の学部長を見た時、森センター長は思わず声を上げた。そこに居たのはかつてメッカの大学で共に机を並べ勉強していた友人だったのだ。思いがけない再会に20年以上の隔たりを忘れて一気に学生時代に戻ったような感覚になって話に花が咲いた。かつて同じ大学で学んだ友人が重要なポストに就いているのを見るのは自分のことのように嬉しいものである。

ヨルダン大学のシャリーア学部はイスラーム法学科とイスラーム神学科の二つからなっていて、外国からの留学生のためにはアラビア語の語学学校も併設されている。現在日本人の学生も1人そこで勉強しているそうだ。留学生の受け入れにも積極的に誰でも受け入れるとの事であった。学部長の後、それぞれ二つの学科長を訪れ、カリキュラムの内容などを聞いた。ここでは特定の法学派に限定せずそれぞれの学派を比較して学びやり方を探っているとの事だった。また構内の印象は女学生の多さが特に目に付いた。これはヨルダン大学ばかりではなくヨルダン全体の大学の傾向で、サウジアラビアの大学と比べるとそこはまさしく女学部かと思うほど女学生で溢れている印象だ。

### ヨルダン・ムスリム同胞団代表と面会

13日午後、4番目の訪問先であるムスリム同胞団事務所を訪れた。



ハーシム王子(右から2人目)の自宅にて

パレスチナにあるムスリム同胞団はつい先ほど議会選挙で大勝利を取ったばかりで、これからどのような政府を作るのか世界中から注目を集めている時期で、ここヨルダンではどのような動きがあるか興味があった。しかしヨルダンでの彼らの活動はあくまでもヨルダン王国の体制内での活動を前提としていて、既に議会内にも一定の議席を有していることから敢て自分達だけの政権をとりに行くというより他の政党との協力関係を維持しながら政治活動を行っていくことを前提に、地道な福祉活動を行って人々の信頼を得ていく活動に力を入れているようにみえた。それは彼らの事務所が自分達の運営する病院の中にあることから窺

がえる。代表のアブドルマジード氏もあえて政治には触れず、自分達がいかに暴力を否定し極端に偏らない正統なイスラームを目指しているかを強調していた。今回の預言者ムハンマドの風刺画問題についてもイスラームはキリストもモーゼも預言者の一人として認め敬意を表してきたのに何故キリスト教世界はイスラームの預言者に対して敬意を払わないのか理解できないと語り、互いの宗教に対する尊敬の上にしか理解が進まないことを認めるべきであるとイスラームの立場を代弁していた。

### ハーシム王子との面会

ヨルダン国王の弟の一人であるハーシム王子との面会が急きょ設定されたのは、13日の午後ホテルで休んでいるときだった。その日の朝刊に我々がイスラーム法最高裁長官に会ったという記事が写真入で地元の新聞に掲載されたのを見て驚いていると、その記事を王子も読んで日本人のムスリムである我々に興味を持たれたらしく長官を通じて私邸に招待したいとの電話があった。室達氏と我々の3人だけで警備の車の先導で王族が住む地域の中の小高い山の上にある一軒の家に向かった。家から出てきた王子は、まだ若く後で聞いたら大学生でイスラーム法を勉強しているとの事。ジーンズにシャツというラフな姿は



お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究センター  
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14  
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416  
ホームページURL: <http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/>

拓殖大学 イスラーム研究センター ニュースレター

平成18年3月15日発行  
発行人 拓殖大学イスラーム研究センター  
編集人 イスラーム研究センター主任研究員  
柏原 良英

本当に日本の大学生と変わらないものだった。王子は我々を見晴らしの良いテラスに案内してくれて薪を炊いた火鉢にあたり、アラブコーヒーを飲みながら日本のイスラーム事情や留学体験談などに熱心に耳を傾けてくれた。王子の妹は時々日本を訪れていて彼女から日本のことを聞いていて興味がおありのようだったので是非日本に来られることをお勧めした。ほんの短い間だったが純粋で優しい絵に描いたような王子様を見たような一時だった。

### 国立アール・アルバイト大学学長との面会

14日はヨルダンの北、シリアとの国境に近いマフラックにある国立アール・アルバイト大学を訪問した。この大学は創設されてまだそれほど年月が経っていないので学内の広大な敷地に植えられているオリーブの木はまだそれほど大きくなかった。ヨルダンの大学は総じて敷地が広く大学の建物を探するのに苦労するがこの大学は特に広い敷地で目的のシャリーア学部を探するのに少し手間取った。この大学は特に留学生の数が多くそうアジアの留学生の姿もちらほら見えた。最初にシャリーア学部長に面会したが彼の本来の事務所は今改装中とかで別の場所で事務を取っていた。ここでも教授の一人がかつて我々と同じ頃メッカの大学で勉強していたことが分かり奇遇に驚かされた。この大学でも留学生の受け入れは積極的に行っていて日本からの留学生はいつでも歓迎されることや、国王の援助で外国人留学生20人に毎年奨学金を出しているという話も聞いた。それから急に予定になかった大学の学長に会う段取りが組まれ急ぎょ学長室に連れて行かれた。アブドゥッサラーム学長はその前は宗教大臣を務めた人で、ここでもどこからやってきたのか新聞記者が我々の大学訪問の記事を書いて翌日の新聞に掲載された。学長との面会の中で日本人の留学生については特に二人分の奨学金を出すことを約束してくれた。ヨルダンではどこへ行っても日本のイスラームについての関心が高く、イスラームを正しく伝えようとする我々への期待も大きいと感じた。その表れがこの日本人への特別な奨学金提供に現れていると言えよう。

### ヨルダン元文部大臣からの招待

14日の夜はアール・アルバイト大学の近くの町イルビトに室達氏の知り合いのお父さんで元文部大臣だった人がいて我々を是非夕食に招待したいというので御呼ばれすることになった。急に降り出した雨の中を彼の家に向かった。元大臣だった人だからどんな立派な屋敷に住んでいるのかと思ったらそれほど大きくない極普通の民家で庶民的な暮らしをしているおじいさんだった。しかし文部大臣をやっただけあってその教養は高く、我々にもゆっくりとした聞き取りやすい正調のアラビア語で色々な話題を話してくれた。面白かったのは日本の社会制度とイスラームの共通点が、集団における基本が互いの友愛と慈悲と合意にあることだとかつて著書に書いたという話だった。日本のことをよく研究していると感心した。おまけに「過労死」という日本語までご存知なのには驚いた。また彼は詩人でもあるそうで、かつてアラ

ブの詩人が日本の少女を詠んだ有名な詩を朗々と披露してくれた。食事はマンサフと言うヨルダンの客をもてなす代表的な肉とご飯の炊き込み料理だった。大皿にご飯が山盛りに盛られその上に羊肉が豪快に横たわるそれを直接手やスプーンを使って口に運ぶ。サウジアラビアでも同じ様式でカブサと呼ばれるものだ。料理とコーヒーと果物で一杯になったおなかを抱えてアンマンへ向かったが、途中前が見えないほどの大雨に降られて帰ることになった。

### ヨルダン南部の中心マアンでのホームステイ体験

15日は朝7時にホテルを出発してヨルダン南部の町マアンへ向かった。そこには今回泊めていただくことになっているヨルダン人と結婚した日本人女性の家がある。ホテルを出るときはまだ昨夜の雨が残っていたが、3時間ひたすら車をとぼして到着した砂漠の真ん中にある



ヨルダン大学シャリーア学部長と共に

マアンに着く頃には雨は止んでいた。その代わり冷たい北風が容赦なく吹き付けていた。家は砂漠の入り口にあり、目の前にはなだらかな砂のうねりが幾重にも重なって連続する荒野が果てしなく続いている。今回お邪魔したのは庶民生活の中でシャリーアが実際にどのように機能しているかを冠婚葬祭を通して見てみたいという願いを快く受け入れていただいていた。この町はアンマンへ行くよりサウジアラビアの町に行く方が近いという土地柄で、言葉もほとんどサウジアラビアの我々がいたメッカと同じヒジャーズ地方の言葉

で懐かしかった。かつてはメッカへ巡礼を行うためにエジプトやトルコなどから多くの巡礼者がこの町で泊まる宿場町になっていて町中で巡礼者を歓待したそうだ。今でも旅行者や外で働く人には黙っていても水や飲み物を提供する習慣が残っているとのこと。かつての巡礼者たちの賑わいがどんなに大きかったか今の町の様子からは想像できない。またここには部族社会が根強く残っており、我々がお世話になったこの家は大きな3つある部族の一つに属し、その氏族の一つを代表する名門で代々長男がそれを引き継いでいくのだそうだ。彼らは純粋な地元のヨルダン人であるという誇りが強く、ここでは部族の慣習が政府の規則より優先する。それには警察も手が出せないそうで、たびたび警察と衝突することがあっても警察の方が退散するといって自慢していた。その原因は彼らなりの正義の実践から起こることで無謀な暴力ではないとし、シャリーアが実践されていないから彼らがそれを実践しているのだと主張していた。アラブの伝統的な社会が今も厳然としてそこに存在しているのである。また葬儀についてはサウジアラビアとやり方は似ていて、彼らの墓地を見学したが基本的に墓標は立てずに簡単に石で周りを囲み頭と足に目印の石を置くだけの墓が多かった。ただ土地が広いので掘り返して再利用することはなく昔からの墓がそのまま残っていた。そして墓もそれぞれの部族に分かれて所有しているのはいかにも部族意識の強い社会を表して興味深い。

今回は初めてのヨルダンだったが、短い時間の中で色々な人々に会い、様々な人々の暮らし振りを垣間見ることができたのは貴重な体験であった。